

那珂 67

— 那珂遺跡群第135次調査報告 —



2013

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が育まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成23年度におこないました、那珂遺跡群第135次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用負担をはじめとした様々なご協力をいただきました、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

- 例言 -

- ・本書は福岡市教育委員会が、平成23年度に実施した那珂遺跡群第135次調査の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書における方位は座標北（世界測地系）であり、遺構についてはSB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）といった略号を使用している。
- ・本書の執筆、編集は藏富士がおこなった。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目 次

I	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の記録	
1.	層序	4
2.	遺構・遺物	6
(1)	竪穴住居 (SC)	6
(2)	溝 (SD)	10
(3)	土坑 (SK)	12
(4)	井戸 (SE)	15
(5)	掘立柱建物 (SB)	15
(6)	柱穴出土の遺物	15
(7)	その他の遺物	16
IV	まとめ	16

挿図目次

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 図1 那珂遺跡群 (1/5,000) | 図10 SD (1/60) |
| 図2 周辺の調査 (1/2,000) | 図11 SD002 出土遺物 (1/3・1/4) |
| 図3 調査区位置 (1/400) | 図12 SD010 (1/60) |
| 図4 土層 (1/200・1/60) | 図13 SK (1/60) |
| 図5 遺構配置 (1/120) | 図14 SK・SE 出土遺物 (1/3) |
| 図6 SC003 (1/60・1/3) | 図15 SB018 (1/100・1/3) |
| 図7 SC008 (1/60・1/3) | 図16 SP 出土遺物 (1/3) |
| 図8 SC013・014 (1/60) | 図17 その他の遺物 (1/3) |
| 図9 SC012・203 (1/60・1/3) | |

図版目次

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 図版1 1 西側調査区 (南西から) | 2 東側調査区 (南西から) |
| 3 北東側調査区 (西から) | |
| 図版2 1 SC003 (東から) | 2 SC013・014 (北東から) |
| 3 SC008 (南西から) | 4 SC008 カマド (南西から) |
| 5 SC012・203 (北東から) | 6 SC012・203 (南から) |
| 図版3 1 東側調査区 (南東から) | 2 東側調査区土層 (北西から) |
| 3 切り落とし1・SD002 (南から) | 4 切り落とし2 (東から) |
| 5 切り落とし3 (南から) | 6 SC・SK (東から) |
| 図版4 1 SD002・004 (西から) | 2 SD005 (南から) |
| 3 SE207 (南から) | 4 SK009 (北東から) |
| 5 SK009・011 (南東から) | 6 SK201 (北西から) |

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 23 年 8 月 23 日、博多区東光寺町一丁目 264、265、266 番における宅地造成に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は埋蔵文化財包蔵地内（那珂遺跡群）であることから、埋蔵文化財第 1 課では試掘調査をおこない、現地表下 30cm 前後で遺跡の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。発掘調査は平成 24 年 1 月 10 日に開始し、3 月 7 日に全ての業務を終了した。調査手順の関係上、途中 2 回の土砂反転を行っている。今回の調査にあたっては、関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

(1) 平成 23 年度

調査主体 福岡市教育委員会

事前審査	埋蔵文化財第 1 課	課長	濱石哲也
		係長	宮井善朗
		総括主任	加藤良彦
		事前審査係	木下博文
総括	埋蔵文化財第 2 課	課長	田中壽夫
		調査第 1 係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第 1 課	管理係	井上幸江
担当	埋蔵文化財第 2 課	調査第 1 係	藏富士寛

(2) 平成 24 年度

調査主体 経済観光文化局

総括	埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗
		調査第 1 係長	常松幹雄
庶務	埋蔵文化財審査課	管理係	川村啓子
担当	文化財保護課	運用係	藏富士寛
整理作業	大石加代子	萩本恵子	

遺跡調査番号	1136		遺跡略号	NAK135
所在地	博多区東光寺町一丁目 264・265・266		分布地図番号	東光寺 37
開発面積	1,070.8m ²	調査対象面積	226.0m ²	調査面積
調査期間	平成 24 年 1 月 10 日～平成 24 年 3 月 7 日		事前審査番号	23 - 2 - 469

II 位置と環境

福岡平野は、西は背振山塊から派生した長垂丘陵、東は犬鳴・三群山地によって画された地域の総称である。その内、飯倉丘陵の西側に位置し、室見川流域に広がる早良平野、月隈丘陵によって画され那珂川・御笠川流域に広がる狭義の福岡平野、多々良川・宇美川等によって形成された糟屋平野に細分できる。

那珂遺跡群は狭義の福岡平野中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた標高5～8mの洪積台地上に存在する。那珂遺跡群の北側には、鞍部を挟んで比恵遺跡群が存在し、遺構の分布状況を考えれば、一連の遺跡として認識することも可能である。両者を含めれば、その範囲は南北2.4km、東西1kmの広大なものとなる（図1）。那珂遺跡群には古く旧石器時代からの遺物も出土しているが、遺跡として本格的な展開を見せるのは弥生時代になってからであり、中期には台地の全体で集落が構成される。以後、古墳時代・奈良時代と遺跡の隆盛は続いている。

調査地点は那珂・比恵遺跡群の存在する丘陵のほぼ中央、那珂遺跡群内では北東寄りの位置にある。周囲では、北側で123・132次調査などが、実施されているが、近隣では小規模な66次調査がなされているのみであり、周辺の状況は意外に分かっていない（図2）。これまでの試掘調査の結果、そして現況の地形をみても、調査地点は台地の縁辺部近くに当たることが予想され、今次調査は、旧地形の把握、そして遺跡の広がりをみる上でも注目された。

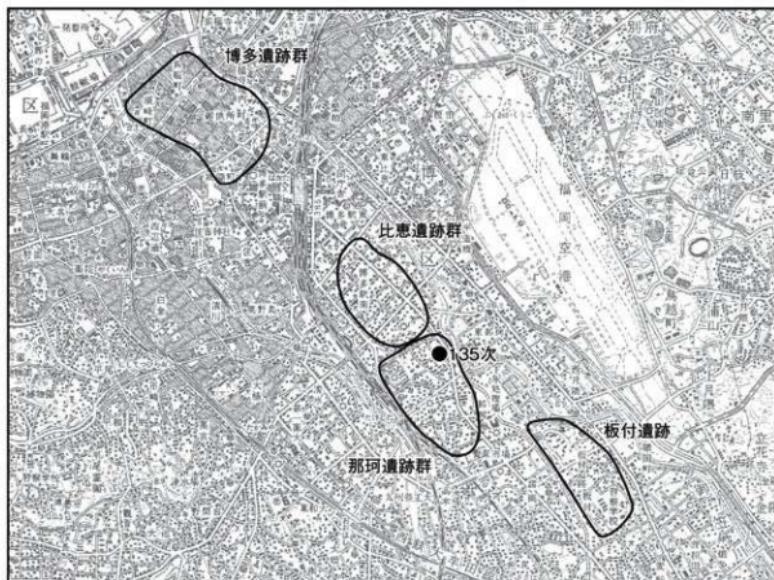


図1 那珂遺跡群 (1/5,000)

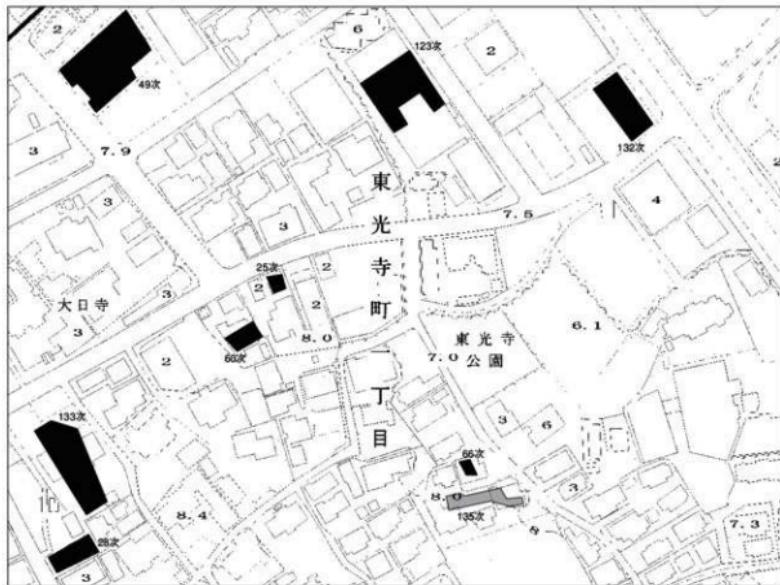


図2 周辺の調査 (1/2,000)

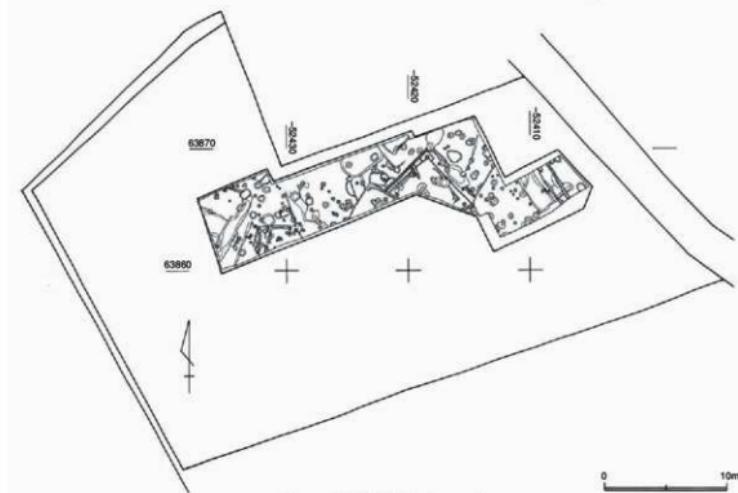


図3 調査区位置 (1/400)

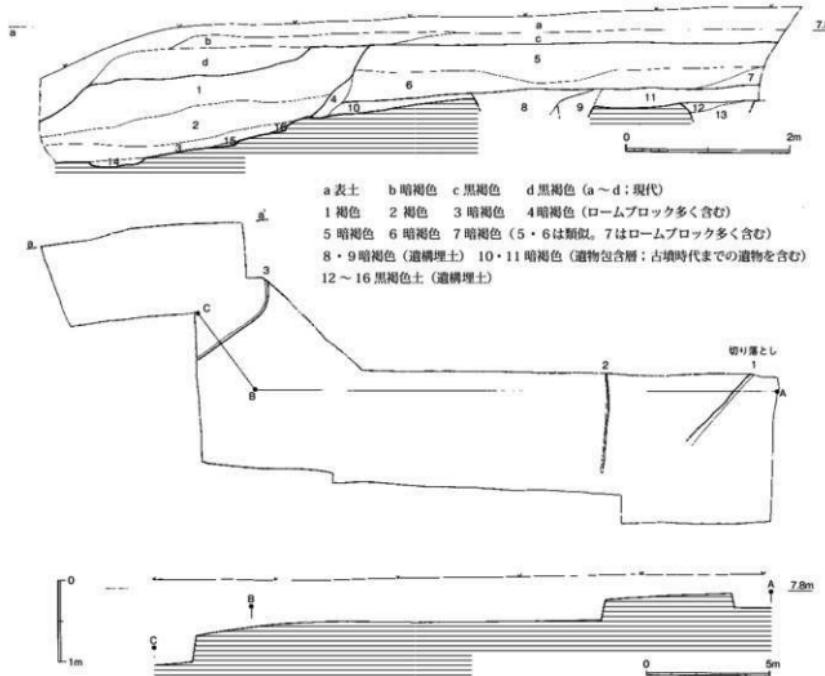
III 調査の記録

1. 層序

今次調査は、標高7~8m前後の鳥栖ローム上を遺構面とし、調査を開始した。確認した遺構には、堅穴住居、溝、井戸、掘立柱建物、土坑、ビット等がある。遺構面最高所では、現地表下25cmほどで、ロームを確認できる。

遺構面は大きく3箇所の切り落とし部分があり（図4下）、大きく削平を受けている。中世前半の遺構も削平を受けているので、それが行われた時期は比較的新しいのだろう。切り落としは東へ向かうにつれて深くなっている、実際ローム面も本来は東へ向かって下降していたのである。

図4上は、調査区西端の土層を示したものである。a~d層は表土および現代の擾乱層である。5~7層は切り落とし3後の堆積層である。各層は比較的均一で、わずかではあるが白磁・青磁など中世前半までの遺物を含む。10~11層は古墳時代前期までの遺物を含む包含層であり、8・9層（ビット埋土）が示すように、これを切り込む遺構も存在している。



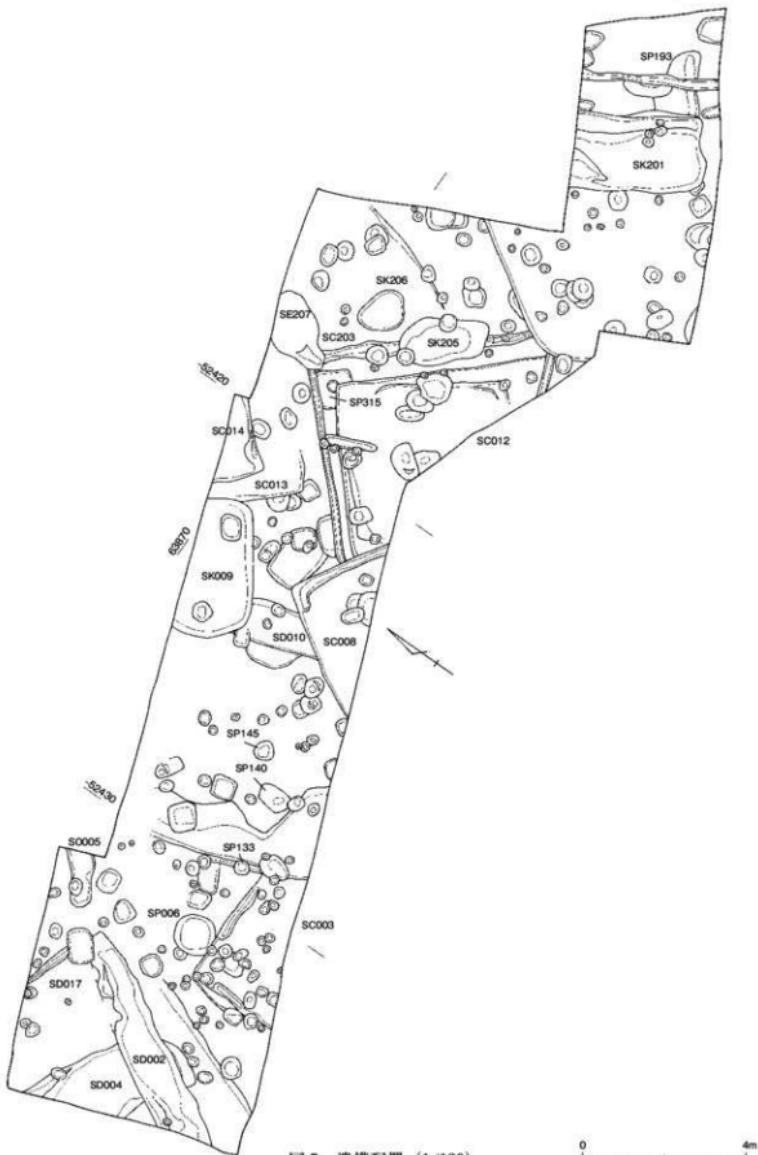


図5 遺構配置 (1/120)

0 4m

5層の堆積はほぼ水平であり、この段階には、この地は現況と同じく平坦になっていたのだろう。なお、1～3そして4層は調査区東端が5層の上面から削りとられた後の堆積層である。調査区東端は前面道路と比高差のある崖面をなしているが、この掘削部分は、この崖面のあり方と共に共通するものである。近隣の方にかつてこの崖面部分には石垣があったとのお話を伺ったが、1～3層との関係は不明。いずれにせよ、これも比較的最近の造作によるものと考えてよい。

2. 遺構・遺物

(1) 壁穴住居 (SC)

壁穴住居は調査区調査区中央より西側にある。少なくとも6軒の存在を確認した。ただ、先にも述べたように、調査区はかなり削平を受けており、住居の遺存状況も悪い。SC012・203の周辺には、住居掘方の名残とも考えられる浅い段部分や、壁溝の残存部分を思わせる細い溝なども検出されており、本来は更に多くの住居が存在していたのであろう。

SC003 (図6)

調査区西側に位置する。調査区内では、北西隅の一部が存在する。規模および全形は不明であるが、平面方形を呈する壁穴住居であろう。東側は切り落とし2に切られている。住居は深さ数cmほどで、遺存状況は悪い。埋土および住居床面から焼土は確認できなかった。住居掘方の各辺には、部分的に溝状の掘り込みがあり、本来は周囲に壁溝が巡らされていたのであろう。しかし、その溝も深さ数cmに過ぎず、しっかりととした深さを持つものではない。住居隅部で検出した径50cm程の柱穴が、この住居の主柱穴に相当し、深さ45cmを測る。この配置をみれば、SC003は4本柱の住居であった可能性が高い。住居西側は、壁溝を持つ住居掘り込みの外側に、段状をなす掘り込みが認められる。これはSC003が建替等のなされた可能性を示すものだろうか。ところで、住居周辺には多くの小ピットが存在するが、これらの大半は、時期的に新しい。

遺物の出土はごくわずかで、図化に耐えるものは少ない。しかし、弥生土器等の細片に混じって、古墳時代後期後半の須恵器がいくつか出土しており、SC003もこの時期に比定できるだろう。

出土遺物 (図6)

図化の可能な1点のみを図示した。1は須恵器短頸壺の口縁部片である。口縁部外面にはわずかにカキ目痕跡が残る。住居埋土より出土。

SC008 (図7)

調査区のはば中央に位置する。調査区内では、北隅の一部のみが確認できた。規模および全形は不明。住居北東側では、SC012・203を、北西側ではSD010をそれぞれ切り込んでいる。住居の掘方には深さ数cmほどで、SC003と同じく、遺存状況は悪い。住居の北東辺には溝状の掘り込みがあるが、深さ数cmに過ぎない、ごく浅いものである。住居北西辺の近くでは焼土、そしてその周囲には白色粘土を検出した。この部分にカマドが存在していたのだろう。カマド直下には、SD010が存在しており、カマドはSD010の埋土の上に存在する。住居内では、複数の切り合いのある柱穴を確認しているが、これがこの住居の主柱穴に相当する。最も深いものは、平面径70cm、深さ60cmを測る。この配置をみれば、SC008も4本柱の住居であった可能性が高い。主柱穴における複数の切り合いも、建替の可能性を示しているのかもしれない。

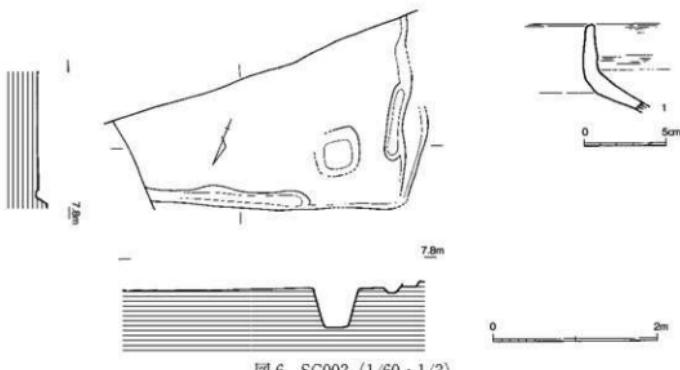


図6 SC003 (1/60・1/3)

SC008も、遺存状況が悪く、埋土中からは土器の細片が出土するのみである。しかし、先に述べた、カマドの周辺および粘土中から、須恵器・土師器がいくつか出土しており、これらをみれば、SC008は古墳時代後期後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図7～1～3）

1～3は、いずれもカマド掘り下げ中に出土した。1は須恵器杯蓋である。口径(復元)13.0cmを測る。2は須恵器杯身の口縁部片である。立ち上がりは短いが、比較的直立する。3は土師器高杯の基部片である。

SC013（図8）

調査区中央の北寄りに位置する。調査区内では、南隅部がわずかに確認できたに過ぎない。主柱穴は確認できず、住居の規模および全形は不明である。掘方は深さ15cmほどで、遺存状況は悪い。住居南東辺には、部分的に溝状の掘り込みがある。出土遺物は土器の細片のみで、図化に耐えない。

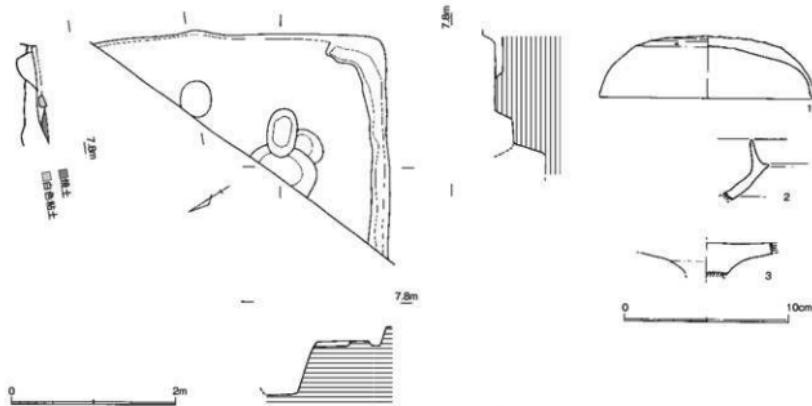


図7 SC008 (1/60・1/3)

SC014 (図8)

調査区の中央、SC013の北寄りに存在する。

調査区内では、南隅部がわずかに確認できたに過ぎない。現代の擾乱が激しく、また掘方も深さ30cmほどで、遺存状況は悪い。この住居に伴う柱穴等は確認できていない。出土遺物は土器の細片のみで、図化に耐えうるものではない。

ところで、この住居はSC013と接した位置にあり、しかも住居の各辺は並行する。そういう点では後述するSC012・203の関係に類似するともいえるだろう。SC013と014は、互いに関連する遺構であった可能性がある。

SC012・203 (図9)

調査区の中央や東寄りに位置する。住居の北隅部を中心に、調査区内では、住居の1/2弱が検出されている。ここでは、平面「く」字形を呈する溝をSC203、その一回り小さい平面方形の落ち込みをSC012と呼んでおくことにする。いずれも掘方は深さ10~20cmほどと浅く、遺存状況は悪い。住居内にある、2柱穴が切り合いである柱穴が、SC012・203の主柱穴だろう。これら住居の周辺には、壁溝の残存部分を思わせる細溝が確認でき、これ以上の住居が存在していた可能性も考える必要がある。

ところで、SC012とSC203は各辺が平行しており、互いに密接な関連があることは明らかであり、これらが2つの住居ではなく1つの住居、つまり平面「く」字形を呈する溝が、SC203の存在を示すものではなく、SC012を構成する遺構の一部であった可能性も否定できない。この場合、部分的にではあるが、SC203の壁溝内に小穴が認められることも注目すべきかもしれない。しかし、両者を同一の住居と捉えた場合、その構造にも疑問点が多い。SC012と壁溝(SC203)との間は、20~50cmほどしかなく、例えばベッド状遺構と考えるには余りに幅狭である。調査の不手際から、いずれの場合が適当であるかを判断することができなかった。

SC012の床面には、浅い段をなす深さ10cmほどの掘り込みが認められる。これを担当者は住居の貼床部分であると判断している。ただ、中央にある大きな土坑状の掘り込みは、他遺構の切込みである可能性もある。

SC012・203は遺存状況が悪く、埋土中および柱穴からは、主に土師質土器の細片が出土のみである。しかも時期幅があるものも含まれている。SC012・203はSB018の柱穴の一つと切り合いであり、担当者はSC012・203がSB018に後出するものと判断している。不明な点も多いが、ここではSC012・203を古墳時代前期の範疇で捉えておきたい。

出土遺物 (図9)

多くは図化に耐えない土器の細片である。以下では、埋土より出土した図化の可能であった資料について述べる。1~3のいずれもSC012の埋土中から出土している。1・2は短頸壺。1は口径(復元)10.3cmを測る。3は高杯等の口縁部片であろう。口径(復元)17.6cmを測る。

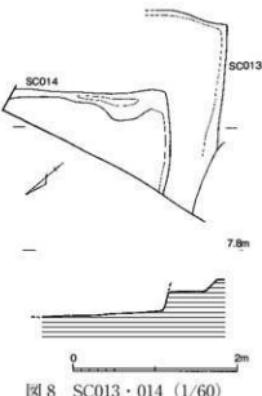


図8 SC013・014 (1/60)

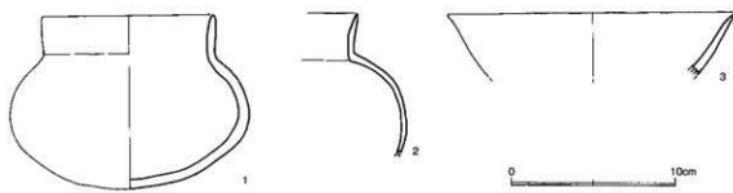
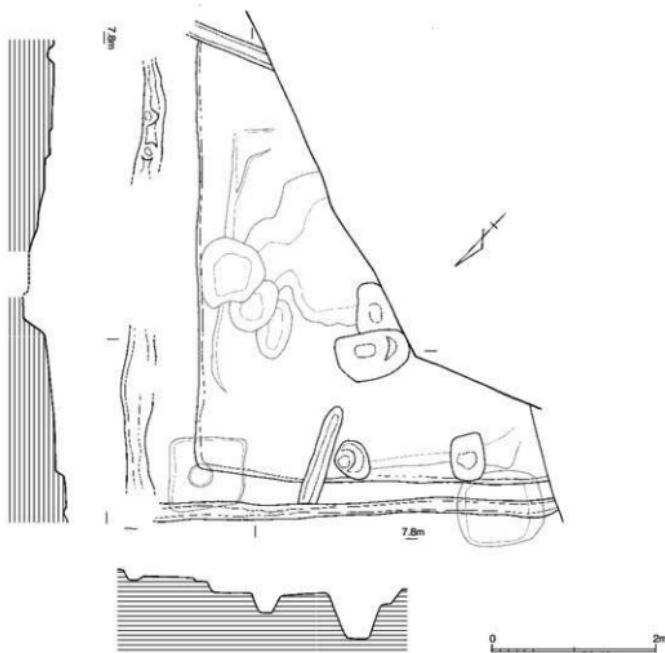


図9 SC012 · 203 (1/60 · 1/3)

(2) 溝 (SD)

溝はSD002・004・005・010・017の5つを報告する。SD010を除き、調査区の西側に集中している。いずれの溝も形状にまとまりがなく、性格も不明である。

SD002 (図10)

調査区西側に位置する。南北方向にのびる溝で、調査区内では長さ6mほどが検出できた。段落ち1にはほぼ平行して存在しており、調査当初は段落ち1とSD002とが関連するのではないかとも考えたが、段落ち1の掘り込みは鋭く直線的で、SD002の造作と違いがあることから、両者は無関係であると判断している。溝の幅は1.1mで、先端へ向かうにつれて次第に細くなる。深さは20~40cmで、底面幅も一定せず、底面はやや起伏に富んでいる。溝は途中で途切れしており、溝の先端部もなだらかではあるが、明確な立ち上がりを有している。SD002の所見および位置関係からみて、担当者はSD002とSD005は同一の溝であると判断している。SD002からは比較的多くの遺物が出土しており、出土遺物から、SD002は古墳時代後期後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物 (図11)

1は土師器壺である。胴上部は内傾しており、口縁部でわずかに屈曲し、外側へと開く。口径(復元)14.8cmを測る。2は須恵器杯蓋である。天井部は丸みを帯びており、口縁端部は比較的鋭さを保つ。天井にはヘラ記号を有する。口径(復元)13.2cmを測る。3は須恵器杯身。立ち上がりは内傾し、退部は丸みを帯びる。器壁はやや厚い。口径(復元)11.2cmを測る。4・5は凹石である。いずれも砂岩製。5は裏面を砥石として使用する。

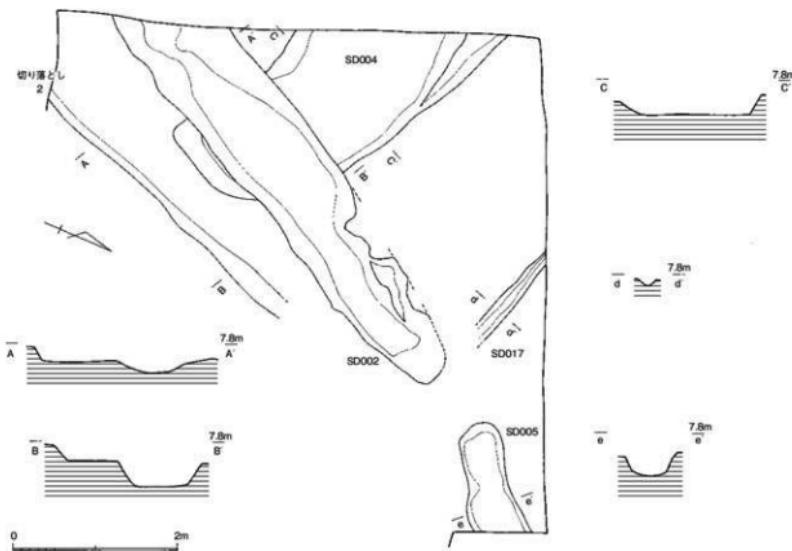


図10 SD (1/60)

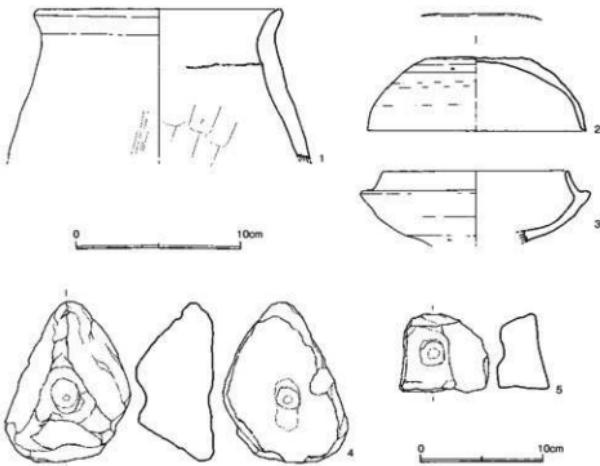


図 11 SD002 出土遺物 (1/3・1/4)

SD004 (図 10)

調査区西端に位置する。SD002 に直交し、東西方向に走る溝で、SD002 に切られ、SB018 の柱穴を切っている。調査区内では 4 m ほどが存在し、途中で途切れている。溝の途切れた先には、段落ち 1 があり、この先に溝が続いている可能性は低いだろう。幅 1.4 ~ 1.8 m、深さ 20 cm を測る。溝の底面はほぼ平坦である。SD004 は、後述する SK201 とも共通性があり、土坑 (SK) と判断すべきかもしれない。出土遺物は小片のみで、図化を行っていない。

SD005 (図 10)

先にも述べたように、SD002 の延長線上に位置する。幅 0.6 m、深さ 20 cm を測る。これが、SD002 に続く溝であるとすれば、SD002・005 は東側へ向かって緩やかに弧を描く溝であるといえる。ただ、SD005 は、先端も含めた各壁の立ち上がりがしっかりとしている。遺物は少なく、図化を行っていないが、SD002 と同一の溝であるという所見に矛盾するものではない。

SD017 (図 10)

調査区西側の北寄りに存在するもので、幅 0.2 m、深さ 20 cm を測る。住居の壁溝である可能性もあるだろう。

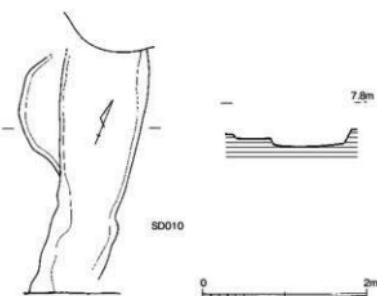


図 12 SD010 (1/60)

SD010 (図 12)

調査区中央に存在するもので、SK009 や SC008 に切られている。遺構検出時は 2mほどが確認でき、SC008 掘り下げ後、更に 1m 分が検出できた。ちょうど SC008 カマド部分の下にあたっている。溝は幅 0.8 ~ 1m、深さ 10 ~ 20cm 程と浅く、底面は平坦である。出土遺物は少なく時期は不明。

(3) 土坑 (SK)

土坑は SK009・011・201・205・206 の 5つを報告する。調査区の中央～東側に存在する。いずれの土坑も時期や形状にまとまりがなく、その性格も不明である。

SK009 (図 13)

調査区中央北寄りに位置する。平面は隅丸長方形を呈し、深さは 20cm 程と浅い。各壁面の立ち上がりはしっかりとしており、底面は平坦である。出土遺物は少ないが、白磁碗や小片のため図化を行っていないが、同安窯系青磁片も出土しており、中世前半に位置づけることができるだろう。

出土遺物 (図 14)

1・2 は白磁碗口縁部片。3 は土師皿である。底面は糸切りで、口径（復元）8.8cm を測る。

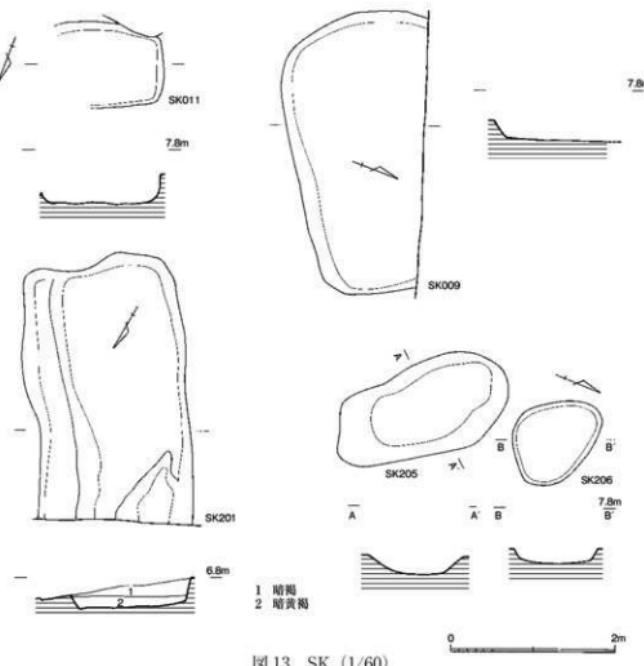


図 13 SK (1/60)

SK011 (図 13)

調査区ほぼ中央に位置する。他遺構との切り合いのため全形は不明だが、遺存部分をみれば、 1.3×1.0 m の平面長方形プランを想定できるだろう。深さは 0.4 m ほどで、各壁はまっすぐに立ち上がる。底面は多少の凹凸があるが、ほぼ平坦である。出土遺物より、古墳時代後半に位置づけることができる。

出土遺物 (図 14)

4 は須恵器甕の胸部片である。上半部に波状文を施す。

SK201 (図 13)

調査区東側に位置する。調査区内では 3.3 m 確認でき、残りは調査区外へと続いている。図では溝の幅は 2 m を測り、北東辺は段をなしているが、これは近世以降の溝との切り合いを誤認したもので、本来は幅 1.5 m 程のものである。深さは 20 ~ 30 cm で、各壁の立ち上がりはしっかりとしている。底面は北西隅の凹部を除けば、ほぼ平坦である。形態的にも SD004 と類似している。

SK201 からは比較的多くの土器が出土した。注意を引く遺物として滑石製の紡錘車があり、その他滑石片も出土していることから、複数個の紡錘車が存在したのだろう。

出土遺物 (図 14)

5 は土師器壺、6 は土師器甕である。6 は口径 (復元) 13.8 cm を測る。7 は土師器椀。口径 (復元) 12.3 cm を測る。8 は滑石製の紡錘車。

SK205 (図 13)

調査区東寄りに位置し、北側には SK205 が存在する。不定形の土坑で SC203 を切り込む。深さ 20 cm を測る。出土遺物はわずかで、時期は不明。

SK206 (図 14)

調査区東寄りに位置し、南側には SK206 が存在する。深さは 20 cm ほど。時期は不明。

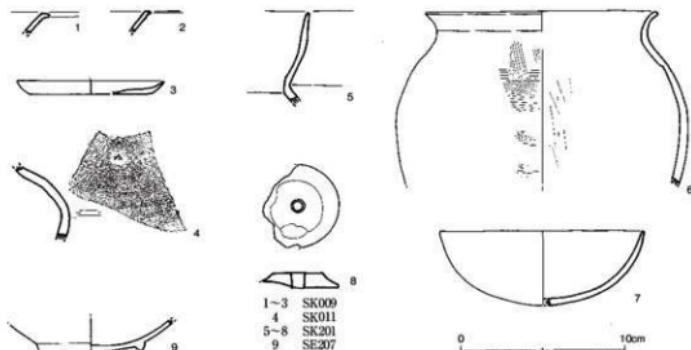


図 14 SK・SE 出土遺物 (1/6)

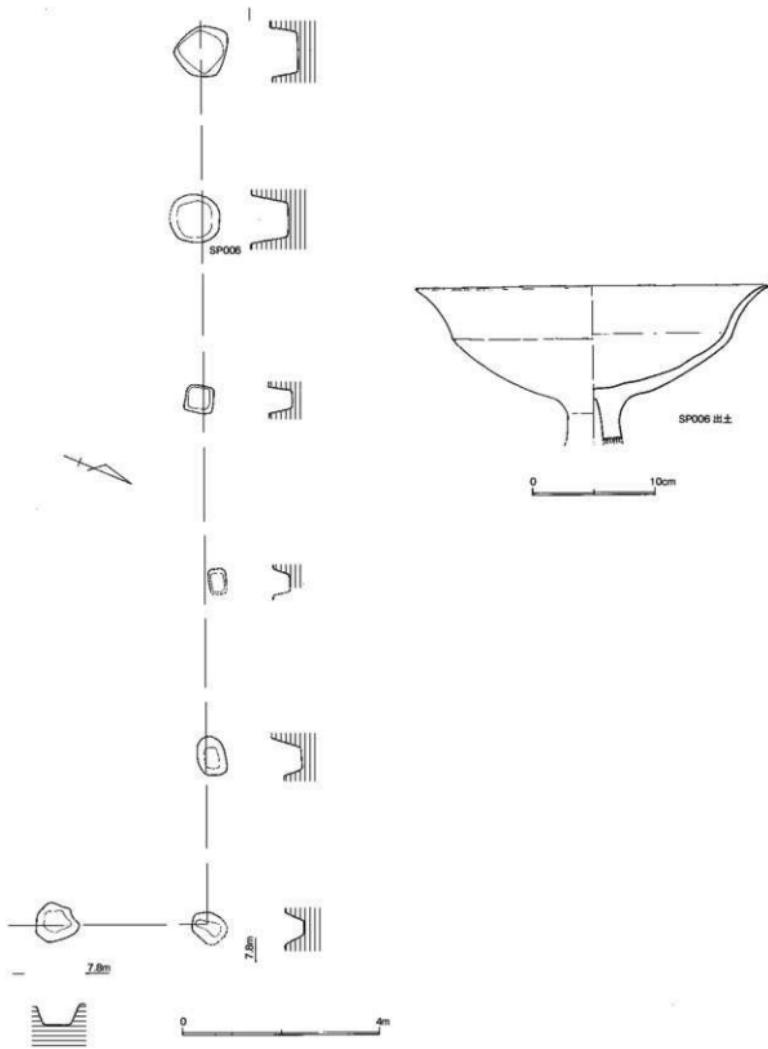


図 15 SB018 (1/100・1/3)

(4) 井戸 (SD)

SE201 (図5)

調査区東側に位置し、SB018の柱穴と切り合う。平面は椭円形を呈している。調査区際にあり、壁面が崩壊して隣地に影響が及ぶ可能性があったため、完掘していない。出土遺物は少ないが、瓦器碗が出土しており、中世前半に位置づけられる。

出土遺物 (図14)

9は瓦器碗底部片である。高台径 6.2cm を測る。

(5) 挖立柱建物 (SB)

SB018 (図15)

調査区西側～中央部を縱断して存在する。梁行2間以上、桁行6間以上、長さ17.8m以上の大型建物である。主軸方位はN - 67° - Eである。大きく削平を受けている柱穴もあり、柱穴の大きさにはばらつきがある。柱間は桁行で西から順に、3.4m・3.65m・3.7m・3.6m・3.5m、梁行で3.1mをそれぞれ測る。柱穴の底面は標高7m前後である。桁行の西から4～6番目の柱穴はそれ以外に比べ、やや柱筋がずれている。しかし、桁行の柱間がほぼ一定であること、柱穴底面の高さがそろっていることを考えて、これらは同一建物の柱穴であると判断した。柱痕跡は不明である。出土遺物は少なく、弥生土器等の細片が多いが、SP006から高杯が出土している。この遺物から、SB018は弥生時代終末に位置づけておきたい。

出土遺物 (図15)

1は高杯杯部片である。杯部途中で屈曲し、口縁部は大きく外反する。口径(復元)28.9cm、基部径3.1cmを測る。

(6) 柱穴 (SP) 出土の遺物 (図16)

1は土師器高杯杯部片である。杯部底面近くで屈曲し、口縁部は外反する。口径(復元)16.4cmを測る。SP133出土。2・3は土師器碗である。2は口径10.3cm、器高5.1cmを測る。SP193出土。3はやや大型で、底面は丸みを帯びる。SP315出土。

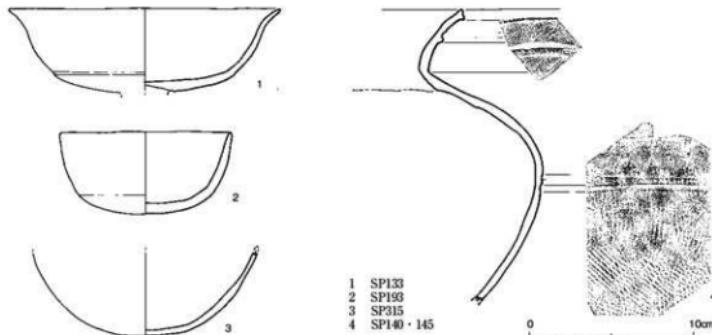


図16 SP出土遺物 (1/3)

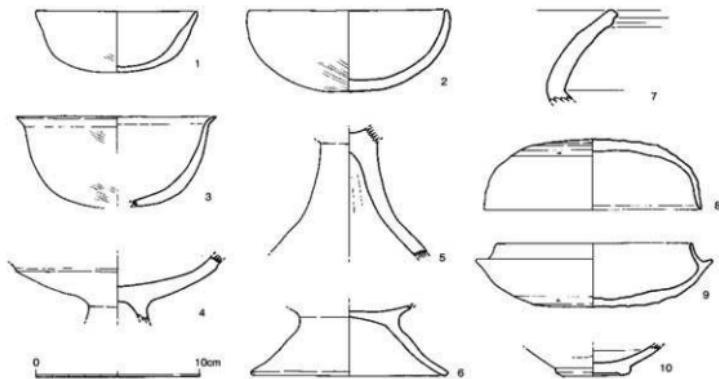


図17 その他の遺物（1/3）

4は須恵器壺である。器壁も薄く、精緻なつくりである。口頸部に2条、胴部に1条の波状文を施す。胴部下方の外器面には平行タタキの痕跡が残るが、胴部内器面はタタキ痕を丁寧にナデ消している。SP140・145出土。

（7） その他の遺物（図17）

1～4は切り落とし2の埋土より出土したものである。1～3は土師器碗、4は高杯である。5・6はいずれも土師器脚部で、北東側調査区の遺構検出中に出土したものである。7～9は切り落とし1の埋土より出土したものである。7は須恵器壺の口縁部片。8・9は須恵器蓋杯である。10は白磁碗底部片で、東側調査区の遺構検出中に出土したものである。

IV まとめ

以下では主な調査成果を記し、まとめに代えたい。

堅穴住居は5もしくは6基を確認した。遺存状況は悪く、いずれもその一部を確認したのみで、全形をうかがうことのできるものは無い。すべて方形プランを呈し、SC008では、カマドの痕跡が残る。主柱穴の掘り返しが行われているものが多い。各住居の規模は不明であるが、SC012・203は比較的大形のものであろう。時期については不明な点も多いが、SC012・203を古墳時代前期、SC003・SC005を古墳時代後期後半に位置づけておきたい。

掘立柱建物は1棟のみを確認した。梁行2間以上、桁行6間以上、長さ17.8m以上の大型建物で、弥生時代終末に位置づけられる。

検出した遺構は、概して遺存状況は良いものでは無かったが、今回の調査では、周辺と同様、弥生時代終末～古墳時代、中世前半の遺構を確認することができた。台地の縁辺部にあたると想像されたが、調査範囲内においてはさほど明確な地山の傾斜を確認してはいない。部分的な発掘調査であり不明な点も多いが、遺構の密度は大変濃い。周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。



西側調査区（南西から）

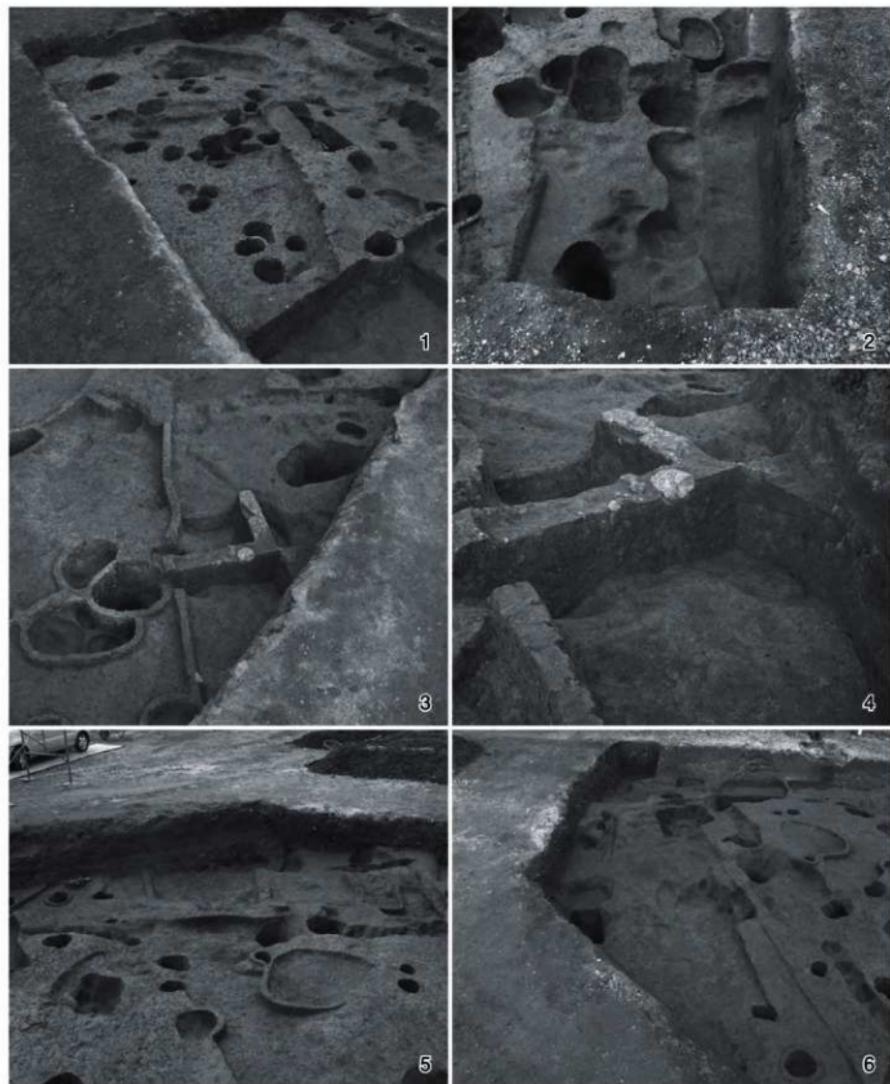


東側調査区（南西から）



北東側調査区（西から）

図版 2



1 SC003 (東から)

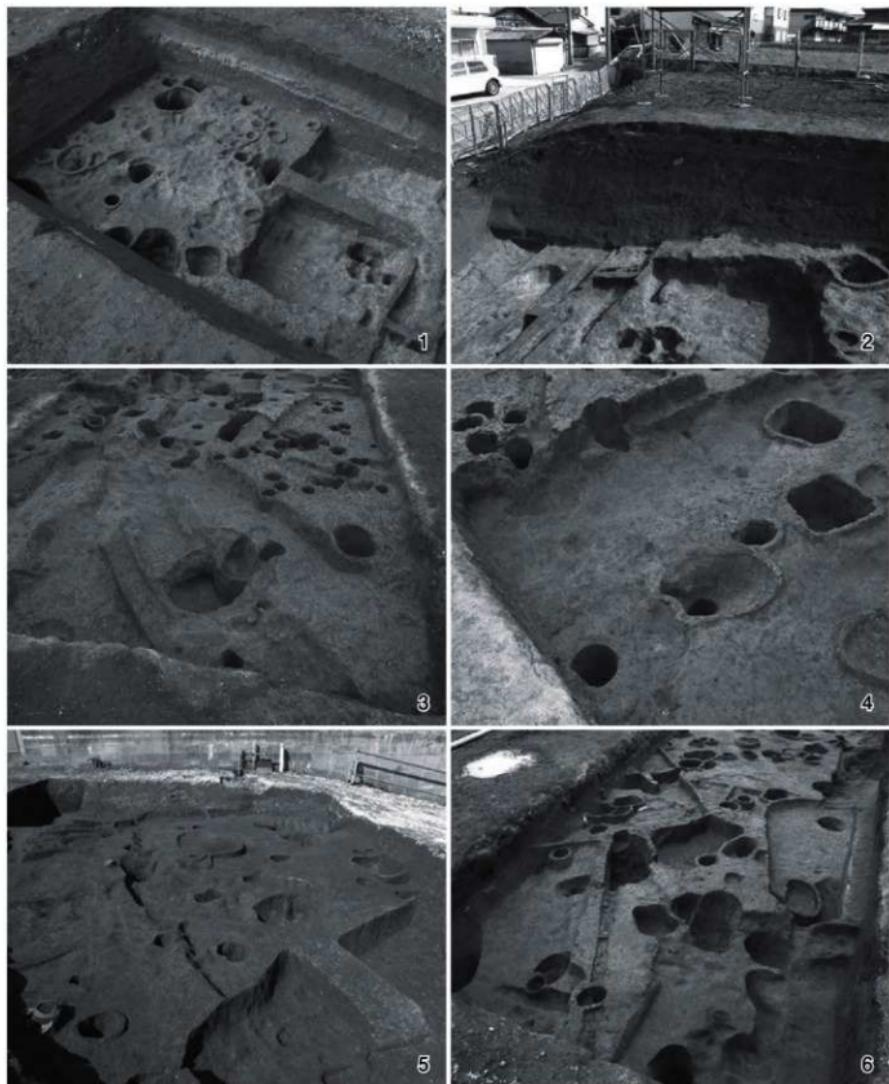
3 SC008 (南西から)

5 SC012・203 (北東から)

2 SC013・014 (北東から)

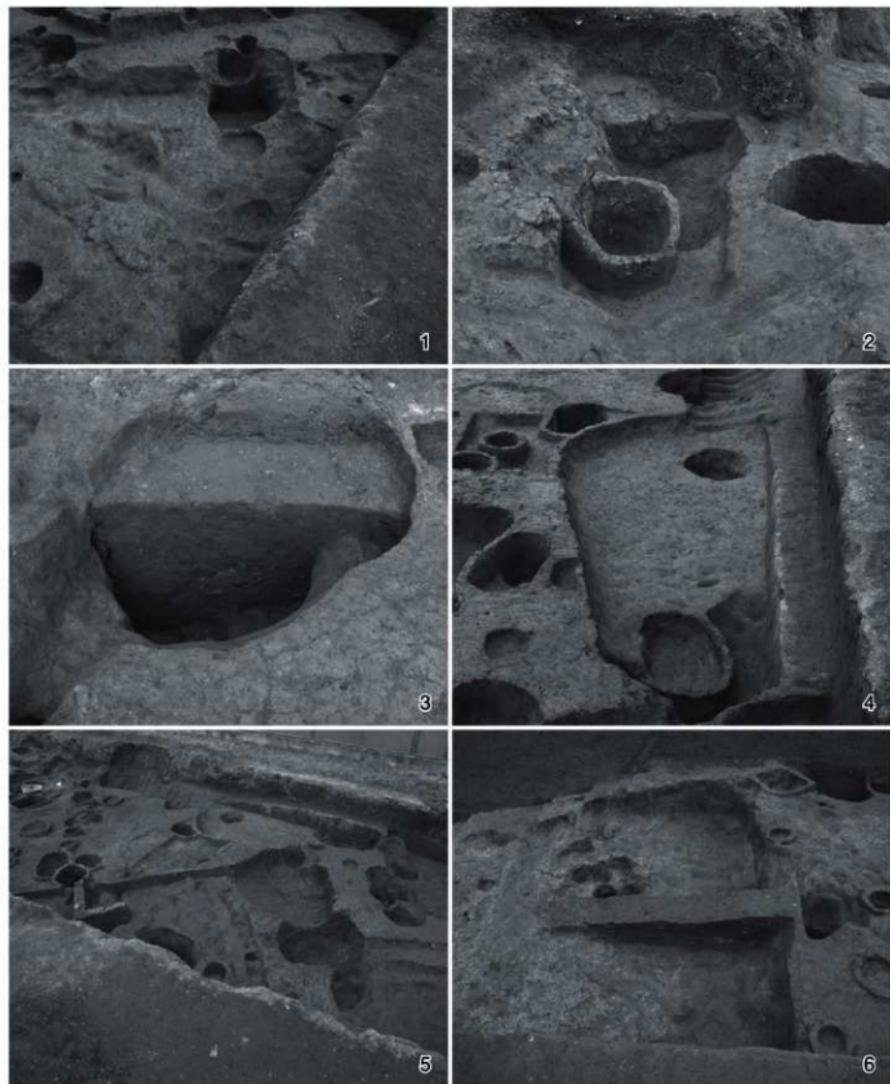
4 SC008 カマド (南西から)

6 SC012・203 (南から)



1 東側調査区（南東から） 2 東側調査区土層（北西から）
3 切り落とし 1・SD002（南から） 4 切り落とし 2（東から）
5 切り落とし 3（南から） 6 SC・SK（東から）

図版 4



1 SD002・004（西から）

3 SE207（南から）

5 SK009・011（南東から）

2 SD005（南から）

4 SK009（北東から）

6 SK201（北西から）

報告書抄録

ふりがな	なか							
書名	那珂67							
副書名	- 那珂遺跡群第135次調査報告 -							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1194集							
編著者名	藏富士 寛							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL092-711-4667							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 * * *	東経 * * *	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村						遺跡番号
那珂遺跡群 だいこくいせきぐん 第135次調査 だいこくいせきぐん じゅうさんじさく	福岡県福岡市博多区 ふくおかけんふくおかしほたく 東光寺町一丁目 とうこうじまちいっとう	40132	0085	33° 34' 28"	130° 26' 7"	20120110 ～ 2012031907	193.3	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
那珂遺跡群 第135次調査	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居・溝 掘立柱建物・土坑 柱穴		弥生土器・土師器 須恵器			
<p>[135次調査] 接出した遺構は、概して遺存状況は良いものでは無かったが、今回の調査では、周辺と同様、弥生時代終末～古墳時代、中世前半の遺構を確認することができた。台地の縁辺部にあたると想像されたが、調査範囲内においてはさほど明確な地山の傾斜を確認してはいない。部分的な発掘調査であり不明な点も多いが、遺構の密度は大変濃い。周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。</p>								

那珂 67

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1194集
2013(平成25)年3月22日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667
印刷 有限会社交信社印刷所
福岡市博多区須崎町12番7号

